1804/05『論理学・形而上学』研究 I

山　内　廣　隆

は　じ　め　に

筆者は先の小論①で、イエナ期ヘーゲルの問題意識はフランクフルト期の「運命」の超克から「反省形式」の克服へと進展するが、後者は前者の哲学化された表現に他ならぬことから、両者は緊密に一本の糸で結ばれると述べておいた。この問題点についての思索の歩みが、イエナ期ヘーゲルの思想発展の過程と言ってよい。この過程のなかで、1804/05年冬学期の『論理学・形而上学』講義は、きわめて重要な位置を占めている。とりわけ、そこで展開される『無限性』(Unendlichkeit) の概念において上述の課題は解決されると言ってよい。我々はまず、この『論理学・形而上学』へと収斂していくイエナ期ヘーゲルの思想の発展を素描してみたい。

(一)

反省形式の克服という課題を提出したヘーゲルの思索の背後で、神的なものとの「結合の力が人間の生から消え失せた」ことを表現している同時代の哲学への批判が働いていた。ペゲラーはこれを「ヘーゲルは神に近づくとは何を意味するかを自問する。彼がこの問いを発するのは同時代の人間が自己自身と神的なものとを隔離してしまったという経験からである」(Pög.S.159) と要約している。ヘーゲルにとって「神に近づく」とは、1800年11月2日付けのあの有名な手紙で表明された「学の体系」の遂行に他ならなかった。そしてかかる体系構築を目ざす哲学が避けて通れぬアポリアこそ反省形式であった。ヘーゲルは『差異論文』において、この反省形式の克服を「絶対者を意識に対して

構成すること」と換言し、この課題の解決の指標を「絶対者の内に分離を定立すること」と定式化する。この二つの観点の実現に、イエナ期ヘーゲルの歩みは凝縮されると言えよう。

しかし『差異論文』では、この課題が既に解決されているかに見える。すなわちヘーゲルは理性を「否定的な絶対者の力」が「絶対的な否定する力」として働くその働きとし、それに依って悟性の分離する働き（反省）を理性の「隠された働き」となす。さらになお分離の働きである悟性を「自己破壊」へ導く働きが、理性の第二の働きと捉えられる。②ここに反省(非同一性)が絶対者（同一性）の内的必然性として定立されているかに見える。

しかしこの観点がシェリング哲学を互解せしめ、自己独自の体系確立の導火線になることをヘーゲルはまだ十分には自覚していなかった。というのもヘーゲルはまだ、思惟と存在という絶対者の二つの現象形式を絶対者の内では無差別であると考えるシェリングに与していたからである。すなわち二つの相対的な絶対者の学の頂点を形成する、「芸術」と「思弁」とは、宗教においてその制限を捨て去ることによって無差別点へ至るとヘーゲルは語るのである。③しかるに「絶対者の否定的な力」としての反省が、絶対者の内的必然性としては考えられていないと言わねばならない。

ところで、周知の如くフィヒテは自我＝自我という第一原則に、第二原則の非我の絶対的反定立を等置し、よってそれらの総合を実践的な無限の努力へと求めざるを得なかった。ここにヘーゲルはフィヒテの思弁の限界を見るのであるが、それこそが経験的意識と先験的意識の絶対的対立の克服、つまり反省形式の克服が課題として立てられるゆえんでもあった。しかし体系構築において上述の如くシェリングに与したといっても、ヘーゲルはフィヒテを一方的に批判したのではない。ヘーゲルのフィヒテへの肯定的評価は「フィヒテ哲学は思弁の真正の所産である」(Dif.S. 115)という言葉に尽くされている。フィヒテ哲

学は非我を自我から、あるいは非我との対立の意識である経験的意識を、自我＝自我の意識である先験的意識から演繹せんとする先験哲学である。ヘーゲルは言う「先験哲学の目ざしているのは経験的意識（非同一性、反省）をその外部にある原理からではなく、内在的原理から、この原理の能動的流出、あるいは自己産出として構成することに他ならない」(Dif. S. 53) と。フィヒテ哲学が真の思弁と評価されるゆえんである。キムメレの言葉を借りれば、先験哲学に基づく哲学の基礎付けへの洞察という点において、ヘーゲルはフィヒテ知識学との共同性をもっていたと言える。④

ところで、このようにイエナ期前半においてヘーゲルの内部で意識されつつも沈潜したままであった先験哲学的な学の基礎付けが明確に志向されるようになるのが、イエナ期後半におけるヘーゲル哲学の特徴である。例えばキムメレは 1804/05の『論理学・形而上学』に関して「体系の基礎付けが自然哲学から独立的に形成され、意識の問題点がフィヒテ的に更新されて前面に出てくる」（Kim.S. 36）と指摘する。意識の問題が前面に出てくるということは、その裏面で、その問題が前面に出てこざるをえぬ絶対者観の変更を伴っていた。その変更は少くなくとも 1803/04の『精神哲学』の冒頭に見ることができる。

まずヘーゲルは「精神をイデーとして」（G.P.S.268）捉え、イデーとしての精神を、存在（同一性）と生成（非同一性）の絶対的同一性である絶対的実体と規定する。すなわち絶対者が精神として把握される。

次に、このような絶対者観の変更は、自然と精神を絶対者の同列的現象と考えるシェリング的体系構成にも及ぶ。すなわち自然は「絶対的存在が自己の生成、つまり無限性から自己を分離した」（ebenda）存在として位置付けられる。従って自然と精神は「生成」の有無によって区別されることになる。この頃の自然と精神との関係についてローゼンクランツは「即自的には自然も精神である。というのも自然を自己の他者として定立するのは精神であるが、こ

の全体（自然）が自己自身を自覚的に（für sich）精神として認識するということはないから」（Ros.S.103）と語り、更に精神の本質は「認識を自己認識（Selbsterkennen）として産出する」（ebenda）ところにあると報告している。⑤ここに「生成」とは「自覚」に他ならず、よって自然は自覚としての生成を欠いており、「精神自身の他者」（G.P.S.275）となる。自然と精神は明確に区別されるのである。

さて、上述の点から「自然哲学」は、「イデーが相互に離れ落ちている」（G.P.S.268）存在を対象とするのであり、それに対して「精神哲学」は絶対的実体がかかる分離から「絶対的普遍性へ自己を取り戻す」（ebenda）圏域であり、イデーの実現の場となる。この「自己を取り戻す」自己実現の働きが、生成に他ならず、自覚の過程に他ならぬ。絶対的実体が精神たるゆえんである。

ここに意識が前面に出てくることになる。すなわち絶対的実体の自己実現の過程を担うのが「意識」（Bewusstsein）である。絶対的実体は意識において自己を反省し、よって分離を意識する。あるいは真に分離を生み出すと言ってよい。しかも絶対的実体は意識によるかかる反省を通じて自らの対象（客観）と自分自身（主観）を媒介する「媒語」（Mitte）となる。ヘーゲルはこの反省の裏面で働く意識の「自己」の働きを「絶対的普遍性は主観、つまり対立という分離において媒語になる」（G.P.S.276）と述べている。反省、つまり主観と客観の分離を意識することが、同時にそれらの媒介という統一への生成を生みだすのである。ここに絶対者の内に反省（非同一性）が、生成・自覚の原理として、すなわち絶対者の内的必然性として定立される基盤をもつことになる。「意識の問題が前面に出てくること」と、「絶対者の内に分離を定立すること」とは相即していたと言えよう。

㈡

以上の点からヘーゲルが『差異論文』で提出していた「絶対者の内に分離を定立すること」という課題解決の方向性が明確にされたと言えよう。元々ヘーゲルには「意識に対して絶対者を構成すること」という謂わばフィヒテ的方向と、主観・客観の同一性としての絶対者を根本に据える謂わばシェリング的方向との、まさしくドイツ観念論的問題意識が存していた。そしてそれらが「絶対者の内に分離を定立すること」という課題へと織り込まれ、ついに一体となるときに、絶対者観の変更をもたらした。更にかかる変更は、意識の有限な諸形式を無限な形式へと高めることによって、学の展開の基礎を形成する「論理学・形而上学」にも大きな影響を及ぼすことになる。我々はまず、①でかかる変更以前の「論理学・形而上学」について述べ、次に②で反省（非同一性）を絶対者の内的必然性として定立するに至った絶対者観の更新と共に現われる、先行する「論理学・形而上学」とは異なる 1804/05の『論理学・形而上学』の新傾向について述べよう。⑥

①、我々は㈠で哲学的反省について述べ、そこで働く悟性と理性の関係を、反省的思惟である悟性の根底に理性の働きの存するをもって後年の「同一性と非同一性の同一性」、つまり真の思弁の立場に通じるかにみえると記しておいた。しかしこの哲学的反省も基本的には「哲学することの道具」という前提の元で語られていたにすぎぬ。かかるものとしての哲学的反省は後年『精神現象学』で、まっ先に「絶対者は一方の側に立ち、認識は他方の側にそれだけで絶対者から分離して立っている」（P.d.G.S.65） と批判される主観性の哲学に通じるものと言えよう。とすると当時のヘーゲルはカント、ヤコービ、フィヒテの哲学を主観性の哲学と批判しながらも、自らがそれに立脚していたが故に、その克服の方法をシェリングに依拠せざるを得なかったと言ってよい。ヘーゲ

ルは『信と知』の論文で主観性の哲学を――キムメレの言葉を借りれば「主観的存在は彼ら（カント、ヤコービ、フィヒテ）の把握に従えば認識する主観の内にある。しかし認識する主観は同時に客観的存在の内にない」(Kim.S.50)が故に――「絶対的媒語」（G.u.W.S.381）を欠いていると批判しながら、自らが絶対的媒語を見出していなかった。因みに先取りして言えば、精神としての絶対者の把握に伴って、1804/05 の『論理学・形而上学』で絶対的媒語が「認識する働き（Erkennen）」（J.L.S124）と捉えられるときに、真の思弁の立場が構築されるのである。しかしながらイエナ前期の「論理学・形而上学」は、以上の如き主観的土壌の上に構想されたのである。

我々はここでローゼンクランツの報告からしか窺いえない 1802/03の「論理学」の特徴を述べよう。そこではまず「絶対的同一性の抽象(Abstraction)」（Ros.S.190）によって有限な認識が成立すると言われる。かかる抽象によって生み出される有限な認識（反省、悟性認識）の無限な認識（絶対者の認識である思弁、理性認識）のエレメントへの過程が三段階として示される。この過程が「論理学」である。まず第一の段階は「悟性によって理性を奪われ」ている「有限性の諸形式を立てる」（ebenda）段階、すなわち反省的思惟による非同一性の出現である。そして次の段階は、かかる非同一性の克服であるが、それは悟性による「理性の模倣（nachahmen）」（ebenda）であり、「形式的同一性」を産出するにすぎぬとされる。更に最後が、形式的同一性である「悟性的形式そのものを理性によって廃棄する（aufheben）」（Ros.S.191）段階であり、この段階が「理性の否定的あるいは破壊的側面」（ebenda）と言われる。このような過程を通じて「論理学」は「本来的（eigentlich）哲学」（Ros.S.192）である「形而上学」へ移行するのである。ここで「論理学」が非本来的学すなわち学の予備学として考えられていることは明白である。従って「論理学」の以上の三行程は「論理学が反省を完全に……取り除く（aus

dem Wege räumen）」(Ros.S.191）過程である。従って、絶対者の認識である無限な認識から反省が閉め出され、よって反省は無限な認識の外に置かれていることになる。反省は、その存在の権利をただ否定されるものとしてのみ有すると言えよう。とすると、この当時に考えられていた思弁とは、反省を閉め出す抽象的思弁であったのである。

②、それに対して 1804/05の『論理学・形而上学』の新傾向とは何か。ヘーゲルは次のように語っている。「認識のかかる実現（形而上学）が認識の第二の生成である。第一の生成（論理学）において認識が生成し、第二の生成（形而上学）において認識は自覚的になる」（J.M.S.141）。ここでは絶対的媒語である認識する働きとしての「自己同一的規定性」（Sichselbst gleiche Bestimmtheit）の自己止揚の過程が、自覚の発展に応じて、第一の生成、第二の生成と記されているのである。とすると第一の生成（論理学）は、反省を除去する単なる緒論ではなく、認識を自己認識のエレメントへ導くと同時に、それ自身が自覚の必要欠くべからざるエレメントとなるのである。反省、悟性的思惟が思弁の必要欠くべからざる内的必然性になると言ってよい。このような傾向をデュージングは「それ自身・形而上学を既に自己の内に含む思弁的論理学への移行」（Düs.S.150）を物語るものと述べている。[⑦] もはや「論理学」は予備学ではなくなるのである。

このような新傾向を如実に物語るのが「無限性」（Unendlichkeit）概念であろう。ヘーゲルは 1804/05『論理学』の内部構成において、「単純な関係」の完結として無限性を論じ、後続の「存在の関係」、「思惟の関係」の諸カテゴリー定立の前提となす。以前の「論理学」においては無限性は、有限な反省形式の廃棄である「論理学」の結末において現われた。[⑧] それに対して 1804/05の『論理学』の新傾向は、「関係」（Verhältnis）が無限性の元で展開される点に認められる。かかる無限性については㈣章で論じたい。

(三)

1804/05『論理学』は質のカテゴリーから始まる。そして以上の如き新傾向は、この冒頭部分からも窺えるのである。『論理学』は質の第三のカテゴリーとしての「制限」(Grenze) 概念から始まる。前二者は欠けている。しかしキムメレの推測によると第一のものが「質一般」、単純な自己同一性としての「実在性」(Realität) であり、次が質一般に対立する規定された質による質一般の破壊としての「否定」(Negation) である⑨。そして最後にヘーゲルは対立する前二者の統一への努力を質の制限とよぶ。

ところでヘーゲルは、自己同一的質一般が己れにとどまろうとする働きを「イデールな能動性」(J.L.S.3) とよび、規定された質の同一性に対立する働きを「レールな能動性」(ebenda) とよぶ。このような対立する能動性を共に前提とするとき、統一は最初から対立において制限されている。ヘーゲルはここで「悟性論理学」の一つとしてフィヒテを掲げ⑩、これを批判しているのである。統一を「(両者) が単に廃棄されるべきである (Sollen)」と考える「イデアリスムスとよばれる相対立する能動性から成る構成 (フィヒテ哲学) は、まさしくそれ故にこそ構成の諸段階がこの原理の内部で生起するから悟性論理に他ならない」(J.L.S.4) と。すなわち「この原理」とは、対立する能動性が等しく前提され、これに基づいて統一が求められるということに他ならない。従ってここで求められている統一とは、徹頭徹尾レールな能動性に煩わされ制限されたイデールな能動性にすぎないのである⑪。統一が Sollen にとどまるゆえんである。

またこれに対して引力 (一) と斥力 (多) という対立する力を、単なる方向の差異に還元し、一者である Materie においては、それらの対立は廃棄され「平衡」(Gleichgewicht) を保ち、「合一」(Einssein) されていると考え

る哲学（シエリング）も悟性論理に他ならない。なぜなら、絶対的な質としての二つの力が「自独存在者」（Fürsichseiende）として、かかる合一の外に「存在」（Sein）しているから。かくてこの「存在」、非同一性にとっては、合一、同一性は質の二つの規定性の「無」（Nichts）であることになる。ここに質は存在と無の両極へ分解することになる。

ヘーゲルは以上の如くフィヒテ的原理の批判を経て、シエリング的原理において顕わになる存在と無という絶対的対立へ進む。それが質の究極的「制限」である。「制限においては実在性と否定の無が定立され、かつこの無の外にそれらの存在が定立されている」（J.L.S.5）。制限においては無と存在が一見、gleichgültig に外的に存しているように見える。しかしヘーゲルは一方で、この質の運動に内在する質の「弁証法」（Dialektik）を「質への我々の反省」（J.L.S.7）として摘出し、それによってフィヒテ、シェリングに対する自己の立場を闡明にせんとしている。「質は、制限においてこそ、その絶対的本質に従って存在するところのものである。絶対的本質とは、質がその概念（単純な自己同一性としての実在性）に従って存在すべきではないところのものであり、質の概念がそこへと移行せねばならぬところのものである」（J.L.S.6）。では質がそこへと移行せねばならぬ質の絶対的本質とは何か。ヘーゲルは言う。「制限は否定が（質の）自己自身への関係である限りにおいて初めて真の質である」(ebenda)と。質の概念である単純な自己同一性としての実在性に対して、否定は以前にはその破壊として質の外的なものでしかなかった。しかしいまや制限においては、否定が質の自己関係として捉えられているのである。しかもこれこそが質の絶対的本質なのである。

ここに質の展開が一連の運動として捉えられるに至る。ヘーゲルはその運動を「質の概念としての質は実在性（抽象的同一性）であり、質はそこから出て自己自身の反対、つまり否定(非同一性)となり、そしてこの否定から自己自身の

反対の反対、つまり総体性（Totalität）としての自己自身（具体的同一性）となっている」(J.L.S.7) と述べる。真の質はこのように総体性なのであり、上の運動こそ質の内容を形成するのである。この運動が二重の自己否定として語られていることは言うまでもない。自己否定とは、反省に他ならぬから、ここでは最初の反省が自己他化として、次の反省が自己他化から自己を取り戻す働きとして考えられていると言ってよい。[13] ヘーゲルは統一を「全体の契機（抽象的同一性）であると同様に全体、つまり、最高のイデー（具体的同一性）」(J.L.S.3) であるとも語っているが、このことは逆に全体の内部での反省の働きを浮かび上らせている。すなわち反省は全体を各契機へと分離、独立させると同時に再び各契機を全体との結合へもたらすところの、イデーとしての全体を実現するイデー自身の内在的原理として位置づけられていると言えよう。

我々は以上において質の運動に内在している隠された弁証法的本質を先取的に述べたが、この観点は「無限性」の章においてますます明確になってくる。

(四)

1804/05『論理学』の最初の章「単純な関係」は、A「質」、B「量」に続くC「無限性」(Unendlichkeit) において完結する。ヘーゲルはこの無限性の境地を以下のように述べている。「以前には単純な関係の諸契機の弁証法的なものは我々の反省にすぎなかった。しかしいまや単純な関係が自己の本質において自分に矛盾するということが、単純な関係の自己自身への反省として絶対的に弁証法的本質、無限性として定立されている」(J.L.S.29)。質と量において顕わになる絶対的矛盾が、「単純な関係自身の自己反省」であるような存在の構造が「無限性」に他ならない。このように矛盾が、関係自身の内在的運動であるとき、前章で述べた二重の反省が可能になる。かかるものとしての無限性の本質をヘーゲルは「規定性の絶対的止揚 (das absolnte Aufhe-

ben der Bestimmtheit)」(ebenda) とよぶ。

①、しかしながら、無限性を展開するに当ってまずヘーゲルは「悪無限」(die schlechte Unendlichkeit) を扱う。そして悪無限の悪たるゆえんを「悪無限は、不変のもの (bleibend) として、定立されている一つの規定性において現われるのであるから、一つの規定性であろうとする努力にすぎぬ」(ebenda) と述べる。実は質と量の展開は、一つの規定性を不変のものとして固執する、その点に己れの限界をもっていたのである。そこでヘーゲルは悪無限において再度、質と量を取り上げ「悪実在性（フィヒテ）は質の概念、つまり自己自身にのみ関係するにすぎぬ一つの定立された規定性のもとにとどまっている。同様に悪観念性（シェリング）は量の概念、つまり制限を閉め出すことにとどまっている」(J.L.S.31) と述べる。前者においてヘーゲルは自己同一者としての質を通して、フィヒテの自己同一的自我について語っていると考えてよい。かかる自我が自己自身にのみ関係するということは、規定性としての非我と真に制限し合う関係にないことを意味する。従ってフィヒテは自我と非我の制限について語っているのではなく、「制限の概念」(Kim.S.53) を語っているにすぎぬ。それ故フィヒテの絶対我は「絶対的に制限されない主観」(Kim.S.54) にとどまるのである。この点から逆に「真無限」(die wahrhafte Unendlichkeit) における制限が「自己同一者としての自我が規定性としての非我によって自己の内に立てる」(Kim.S.53) 矛盾として浮かび上がってくる。それに対して後者においてヘーゲルは、量の概念である数的統一（否定の質）と延長（実在性の質）という「量的な区別の形式が単に現象」(Kim.S.80) としてしか捉えられていないが故に、それを閉め出すシェリングの無差別的絶対者を念頭に置いている。それ故シェリングの絶対者は謂わば「絶対的に制限されない客観」とも言えよう。この点から逆に真無限における対立としての区別は「絶対者の外では存しえず、対立それ自身が絶対的なもの」

(ebenda) として把握されねばならないと言えるだろう。

②、ここに「規定性の絶対的止揚」、あるいは「規定性が自己を止揚すること」（J.L.S.33）とよばれる真無限の本質的意味があきらかになってくる。一切は有限者と無限者の関係をいかに把握するかにかかっている。対立的区別において存在する規定性こそ有限者に他ならない。かかる規定性としての有限者自身が絶対的なものとして存する点に真無限の真無限たるゆえんがある。この点をヘーゲルは有限者の側から「規定されたものは自己自身とは別のものであり……直接的な反対であり、規定されたものは他者であることによって自分自身なのである。このことのみが、有限者は無限であり、自己の存在において自己を止揚するという有限者の真の本性なのである」(ebenda) と述べる。ここでは有限者が無限者であることが、有限者の自己止揚として捉えられている。そして〔有限者＝無限者〕＝〔有限者の自己止揚〕のメルクマールは「規定性の直接的自己自身の反対」である。すなわち一が一であるのは多によってであり、多が多であるのは一によってである。そして一と多がこのように関係するとき、一と多は一である。一は一であるとき一でなく、多は多であるとき多ではない。かかる有限者の「絶対的不安（Unruhe）」こそ、有限者が無限者であることの証拠に他ならない。そしてこの不安が、一から多への、多から一への、一と多から一への有限者の自己止揚を惹起するのである。このような有限即無限、無限即有限の構造こそ真無限に他ならないのである。ここにヘーゲル固有の絶対者観が成立する。すなわち「無限に単純なもののみが、つまり統一と数多性が一者（同一性と非同一性の同一性）であるということのみが絶対者である」(J.L.S.34)。イエナ初期に立てられた「絶対者の内に分離を定立する」という課題も、真無限的構造の完成において完全に成就されると言ってもよいであろう。

こうして、対立の根拠は何かと問う古い形而上学的問いは、それ自体が有限

性の表現に他ならぬことになる。なぜならその問い自体に、根拠を「即自かつ対自的に」存在するものと捉え、対立をそうではないものと捉える悪無限的表象が存しているからである。ここにもはやスピノザ―シェリング的実体観は維持できなくなる。有限者によって把握されぬ絶対者は悪無限者である。すなわち「一なる実体（神）のみが存在するという証明は、もしかかる統一が対立そのものから把握されないならば、つまりこの統一が無限者としての統一ではないならば、一と多、そしてそれらの合一の外でおこることになる」(J.L.S.35)。一なる実体のみが存在するという証明は、一なる実体自身において行われねばならない。もしそうでないなら一切の証明は無効である。実体が自己の存在を自己において証明することが「統一が対立そのものから把握される」ことであるなら、対立そのものが実体自身である。つまり真無限である。我々は「対立そのもの」を意識と考えてよいだろう。というのも、意識こそ、自己と意識されたものとを区別する働きであるからである。ここに我々は、真無限的絶対者観の成立において「意識に対して絶対者を構成する」という課題の解決の方向性が、はっきりと示されていると言ってよいだろう。⑬

「反省形式の克服」＝「絶対者の内に分離を定立すること」＝「意識に対して絶対者を構成すること」というイエナ期の出発点に立てられた課題は、三位一体となって、真無限的概念の成立によって解決されると言ってよいだろう。そしてこのことは、自己自身と神的なものとを隔離してしまった同時代人への一つの反措定であると同時に、あの壮大な哲学体系構築への序章であった。

〔引用省略記号〕

J.L.=G.W.F.Hegel, Jenaer Systementwürfe II, in: Gesammelte Werke 7, hrsg. im Auftrag der Deutschen Forschungsgemeinschaft, 1968ff.

J.M.=ebenda

上二者を 1804/05『論理学、形而上学』と略す。

G.u.W.=Jenaer kritische Schriften, ebenda 4,『信と知』と略す。

G.P,=Jenaer Systementwürfe, ebenda 6.『精神哲学』と略す。

Dif.=G.W.F.Hegel,Differenz des Fichteschen und Schellingschen Systems der Philosophie, in: Werke zwanzig Bänden2, hrsg. v,E.Mordenhauer u. K.Michael,1971. 『差異論文』と略す。

P.d.G.=G.W.F. Hegel, Phänomenolo des Geistes. hrsg.v.J. Hoffmeister, 1952.

Ros.=Karl Rosenkranz, G.W.F. Hegels Leben, 1844, 1977.

Pög=Otto Pöggeler, Hegels Idee einer Phänomenologie des Geistes,Alber, 1973.

Kim.=Heinz Kimmerle, Das Problem der Abgeschlossenheit des Denkens, in : Hegel-studien Beiheft 8. 1970.

Düs.=Klaus Düsing, Das Problem der Subjektivität in Hegels Logik, in: Hegel-Studien Beiheft 15, 1976.

注

① 拙稿『イエナ期ヘーゲルの主観性の形而上学』日本哲学会編『哲学』1983年所収

② かかる第二の反省をヘーゲルは「哲学的反省」とよぶ。Vgl.Dif.S.26

③ Vgl, Dif. S.113

④ Vgl, Kim. S.33

⑤ 勿も彼は 1804/05『論理学・形而上学』の年代考証を誤り、それ以前の『人倫の体系』を、それらに続く「精神哲学」と考えている。

⑥ Vgl, Düs. S.150

⑦ Vgl, Kim. S.76

⑧ Vgl. Düs. S.151f.

⑨ Vgl, Kim. S.53

⑩ ebenda

⑪ ここで使用されている ideel は中埜肇氏の言う、一般に「観念的」と訳されるイデールAに該当する。氏はイデアリスムスこそヘーゲル哲学を方向づける根本的思惟としながらも、プラトン以来の観念論の特徴である「有限なものを真実に存在するものとは認めない」立場の観念論をイデアリスムスAとする。この立場はレアリスムスの否定の上に成り立つ。それに対して氏はイデアリスムスBをあげ、これを真にヘーゲル的な思弁的イデアリスムスと考える。この立場は、見せかけのレアールを止揚してイデールへと転化させながら（イデアリスムスA）、その止揚を更に媒介する媒介の媒介の立場であり、本稿四章において扱う真無限の立場である。このイデアリスムスBに対応するのがレアルを内に含むイデールBであり、より正確には ideal と言っ

た方がよい。それに対してイデアリスムスAに対応するのがレアルと対立するイデールAであり、この段階はBの契機となる消極的理性的段階とされる。『思想』1970年9月号所収の『イデアリスムスと自由』(中埜肇)を参照されたい。

⑫ 『精神現象学』序論における「精神」概念に連なるものである。しかし勿論ここで言われているのは質の領域でのことであり、かかる質の弁証法的運動は、とりあえず量を提示することになる。

⑬ 拙稿、前掲書145、146頁を参照されたい。

(比治山女子高校)

Untersuchung über "Logik-Metaphysik" 1804/05, I

Hirotaka Yamauchi

Hegels Aufgabe in Jena war die Überwindung der Form der Reflexion. Die Vorlesung von "Logik-Metaphysik" 1804/05 einnimmt die wichtigen Stelle in der Entwicklung seiner Philosophie in Jena. Diese Aufgabe löst sich, wie mir scheint, durch die Untersuchung des Begriffs der "Unendlichkeit", die in dieser Vorlesung erörtert ist.